

平成18年度 生態系を理解するための野生生物の知見全国大会（仮称） の開催について（案）

1 趣旨

人間の社会活動に伴い排出される化学物質等による野生生物への影響を評価するに当たっては、野生生物の継続的な観察による本来の生態系の把握が必要です。

一方、すでに国内各地では様々な野生生物の観察が永年にわたって行われています。

しかしながら、わが国では蓄積された情報を集約する場が不十分であるため、環境対策の基礎情報としての活用が行われていません。たとえば、ある年にある生物が突然減った場合にも、それが全国共通のことなのか、ほかの種ではどうだったのか、などを確かめるすべがありませんでした。

このため、「生態系を理解するための野生生物の知見全国大会（仮称）」を開催致します。これにより、観察者間における円滑な情報交換とネットワークの形成、さらには環境行政の基礎情報に資することを目指します。なお、本会の成果は ExTEND2005（別紙1参照）においても公表します。

2 対象

定点において継続的に野生生物（生物の種を問わず。ただし、植物を除く。）の観察を行い、活動報告が可能な方。

3 会議内容

- (1) 活動報告（ステージ発表、ポスター発表）
- (2) 環境省 ExTEND2005 研究班員（別紙2参照）の講演
- (3) 意見交換会
- (4) 連絡リストの作成

※なお、参加旅費は環境省が負担致します。

4 今後の予定

参加及び関連情報の登録連絡（HP上） 平成18年5月22日（金）～6月5日（月）
平成18年度全国大会開催（予定） 平成18年8月26日（土） 10：30～15：30
場所：環境パートナーシップオフィス会議室
（東京都渋谷区神宮前 5-53-67 コスモス青山 B2F）

5 お問い合わせ

環境省環境安全課

担当：木山、井藤

メールアドレス：masafumi_kiyama@env.go.jp chigusa_ito@env.go.jp

電話 03(5521)8261

(別紙1) ExTEND2005における野生生物の観察について

ExTEND2005は、化学物質の内分泌かく乱作用に関する環境省の今後の対応方針であり、「内分泌かく乱化学物質」ではなく、「化学物質の内分泌かく乱作用という側面」に着目した取組です。この方針に基づき「野生生物の観察」を推進する取組を行っています。具体的な方針は下記の7項目の柱で構成されています。

- (1) 野生生物の観察
- (2) 環境中濃度の実態把握および暴露の測定
- (3) 基盤的研究の推進
- (4) 影響評価
- (5) リスク評価
- (6) リスク管理
- (7) 情報提供とリスクコミュニケーション等の推進

内分泌かく乱作用が注視されることとなった発端は、野生生物の生殖異常とホルモン作用を持つ物質の暴露との関連が指摘されたことによります。野生生物における異常の把握は生態系を視野におく化学物質対策の原点です。しかしながら、生態系への影響を実験によって検証することは困難です。また、わが国では継続的な野生生物の観察が十分行われていないとの指摘があります。そこでまず、「野生生物の観察」を推進することを第1の柱としました。この場合の「観察」は、異常の検出とその原因の特定を意味するものではなく、まず、わが国における野生生物の状況を観察し、その生態系を理解することに着手する、という意味です。これまで、環境省では、「緑の国勢調査」などにより、各地の野生生物の観察情報の収集を行ってききましたが、身近な生態系の動向を全国的継続的に捉えるという観点で情報を集約するには至っていませんでした。このため、各地の活動による情報を共有できるような場づくりを目指します。具体的には、地域における地道な観察活動等により得られた情報を集約します。

(関連ホームページ)

ExTEND2005のホームページ <http://www.env.go.jp/chemi/end/extend2005/index.html>

化学物質の内分泌かく乱作用に関するホームページ <http://endocrine.eic.or.jp/>

(別紙2)

ExTEND2005 野生生物の知見収集研究メンバー(順不同)

 <p>やすましげき 安間繁樹先生</p> <p>世界自然保護連合種保存委員。東京大学大学院博士課程修了。農学博士(哺乳動物生態学)イリオモテヤマネコの生態研究を世界で最初に手がけ、成果をあげた。</p>	 <p>はなざとたかゆき 花里孝幸先生</p> <p>信州大学山地水環境教育研究センター長。専門は陸水生態学。特に湖沼の動物プランクトンを中心とした生物群集における生物間相互作用の解明に取り組んでいる。</p>	 <p>いくちたいせん 井口泰泉先生</p> <p>基礎生物学研究所環境生物学領域分子環境生物学研究部門兼自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター教授。ミジンコ・ワニ等の雄雌決定メカニズム解明に取り組んでいる。</p>	 <p>あおやまひろあき 青山博昭先生</p> <p>残留農薬研究所毒性部副部長兼生殖毒性研究室長。哺乳動物の内分泌機能、生殖及び発生に関する基礎的研究と、これらに及ぼす化学物質の影響評価に従事している。</p>
--	---	--	--

 <p>さいとうしゅうせい 斉藤秀生先生</p> <p>自然環境研究センター所属。昆虫学専攻。環境アセスメント会社で生物調査後、現在の財団へ。子どもたちと観察会をしながら集めた資料で生物観察の普及グッズ作成も手がけている。</p>	 <p>とだみつひこ 戸田光彦先生</p> <p>財団法人自然環境研究センター主席研究員。近年は両生類・爬虫類の生態と対策について研究している。金沢城のモリアオガエル個体群の動態を20年にわたり調査。</p>	 <p>ふくいゆきお 福井行雄先生</p> <p>広島県立広高校教諭。広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程(後期)水圏資源生物学研究室在籍。専門分野は魚類繁殖生態学。</p>
---	--	--

